

第2部

国際シンポジウム「“モノ”と“ヒト”の人類文化史」に参加して

朝岡 康二

今回、多様な観点から人類文化史を考える試みとして、“モノ”と“ヒト”をめぐるシンポジウムが神奈川大学国際常民文化研究機構の主催によって開催されたが、まことに刺激に富むものであった。

それは単に外国人パネラーが多数参加されたということに止まらず、研究方法ならびに対象が人類学、民俗学、博物館学、伝統手工芸・民間物質文化・文化遺産研究、考古学、文化人類学・海洋人類学・人文地理学・地誌学とたいへんに広い領域に及んでおり、また、地域についても日本・西欧・アフリカ・中国・北極などを含む広範囲なものでもあったことによる。

もちろん私には、ここで語られた個別の“ヒト”と“モノ”の発表について、なにか意味のあるコメントをする知識も能力もなく、せいぜいのところが発表のひとつひとつについて、「なるほど、そういうこともあったか」とか、「そんな考え方もできるのか」などと感心するくらいにすぎない、まことに頼りのない話である。

ましてや、主題も方法も異なるいくつかの発表を重ね合わせて、「人類文化史」として把握・普遍化するなどはまったく能力の及ぶところでない。シンポジウムを終えて「なにか感想を・・・」と問われると、はたと行き詰ってしまうのである。

ではあるが、なにも言わないで「ただ参加しただけ」で済ますのはちょっと無責任であるかと思ひ、このシンポジウムによって触発された点を若干述べて、責任を果たしたことにする。

わたしが“ヒト”と“モノ”のかかわりに興味を持つのは、人類研究（例えば類人猿との比較研究）のように“ヒト”の定義と実態の客観性を求めるからではなく、だからといって「特定の民族文化」あるいは「日本民俗の固有性」の確認といった本質主義を目標にするわけでもなく、ただ「決まった形式のもとに“モノ”と関係を結んでいる自分」をもう少し深く感じ取りたい、というくらいのことである。

そして、このシンポジウムに参加して最初に頭に浮かび、最後まで浮かんで消え、消えては浮かびながら、ついに会場のそとまで持ち出してしまったものが、“モノ”のあつかいにかかわる「わたしの経験と記憶」についてであった。

わたしの周辺の「日常的な“モノ”にかかわる“ヒト”のおこない」には、なにかあらかじめ定まった点があるように思われ、それを仮に生活伝承とっておこう。たとえば、手掴みでご飯を食べてはいけないが、パンやお握りならばよい（最近は握り寿司を箸で食べることも少なくない）。ご飯を食べる時には、右手で箸を使い、左手で碗を持ちあげて食べなければいけない。立って食べたり、歩きながらはいけない、などである（今では立ち食い O.K の若者も少なくないし、箸を使う・手掴みで食べる、などの選択には、食事の目的・場・質なども関係してくるが・・・）。

いずれにしても、食事に際しての「作法」の多くは幼児期から積み重ねた学習と、以後の反復な利用を通して身体化している。考えるまでもない当然・無意識の行動になっているのである（「二足歩行」すら、学習と以後の反復的な活動によって記憶・実用されているといえる）。

そして、たまに外国にいくと、ものの食べ方には右手だけをういた手掴みによるなど、他にもいろいろの方法があることを知り、さらに個別の意味を解説されると、「なるほど」と感心するとともに、「合理」とは実に多様なものとも思うわけである。そして、みな自分たちの方法がもっともおいしい食べ方

であるという。

同様に、右手で書き、箸を持ち、刃物をあつかう習慣は、わたしの育った文化環境においてはごく自然なことで、わたし自身そういうものとしてなんの不思議もなく身に付けてきた。

けれども驚くなかれ、この二十年間ほどにわたるワープロの利用によって、わたしはもうまともな字が書けなくなっていることに、ある日突然に気がついた。

大方の漢字を忘れて「読めるけれども書けない」状態に陥っていることも理由のひとつに違いないが、同時に指が、頭が考えて想像する運動についていけない。制御機能が働かず、勝手な方向に行ってしまう、やたらに暴走する。身体能力が驚くほど変貌しているのである。

子どものころの蠟石・石筆・クレヨン・鉛筆から始まって毛筆・ペン習字と、書く能力のためにずいぶん時間とエネルギーを使ってきた。こうしてようやく獲得したささやかな書く能力は、ワープロという新システムの導入によって、あっという間に体から脱落してしまったのは、まことに情けないことである。

実はわたしの孫の一人はどうやら生来の左利きらしく、放っておくと左手で鉛筆・スプーン・フォーク・鋏をあつかう。本来、右手で書くようにできている（右手で書くことのなかで成立した）仮名文字を書くのに、左手に持った鉛筆を右に押しながら前進させて書く（右利きならば引きながら書くところを）。昆虫が頭を突き出して、よたよたと前に進む様子に似た、ちょっと変わった運筆である。

考えるまでもなく、文字書きにしる、刃物使いにしる、私たちの文化はほぼ右回りに一元化されている。だから、この統一に逆らってなにかを成すことは容易でない。そして、この左右の区別がさらに進むと、両手にそれぞれ異なる役割を課して、そこからの逸脱を厳しく禁じる文化も生じるのである。

孫が左手で「あいうえお」を書く動作は、わたしからはまことに不自然な所作にみえる。しかし、どうも本人にとってはあまり問題ではないようで、実に器用に処理している。わたしたちが右手を使う場合と同じように、左手の鉛筆使いにも、あらかじめ定まった動作・方法があって、ごく自然にひとつの型に則した運びになるものらしいのである。以前にも、孫の場合とほとんど変わらない左手を器用に用いて原稿用紙を埋める学生にたびたび出会うことがあった。そのことも思い出すのである。

右手と左手の使い方の研究は、すでにかかなりの蓄積があるらしいが、わたしはよく知らない。

ここで述べたかったことは、「“ヒト”と“モノ”をつなげる慣習化したふるまい（所作・動作）」は、特定の様式を自然なものとして受け入れて、それを身体化する（上手・下手はあろうが）、ということである。これには時に相反する様式があり、それが文化によって選択され強制されるともいえる（例えば、ある文化で「押す」ものを、ある文化では「引く」。ある文化では立位がある文化での座位となる、など）。また、先のワープロの例のように、まったく異なる人工的なシステムがそれまでの習慣に取って替わった、ということも多々ある。いいかえれば、わたしは身体性の変容・喪失にたびたび晒されてきたのである。

すでに見てきたように、「わたしの記憶と経験」に則して“モノ”と“ヒト”についてみると、かつて個別のあれこれに対して獲得したはずの身体的能力は、すでにかかなりの程度喪失してしまい（記憶としては残っているが）、わたしにはもはや回復不可能である。

それは個人的な加齢効果を指すだけでなく、いわゆる近代的生活スタイルに到るひとつのこの半世紀の過程に関わるものであるに違いない。

だから、今日、このシンポジウムで議論されたように、“モノ”と“ヒト”の関わりを考え、実践しようとすることは、いわば過去の模倣を志すことである。いわば「近代のアイロニー」なのである。